

2018年01月09日（火）【外為L a b】松田哲  
タイトル：【面白くない相場は、それに応じて対処する】

お正月も終わり、今年の成人式も終えた。

いよいよ、今年（2018年）の相場も、本格的に始動した、と言える。

ドル／円に関しては、昨年（2017年）の相場は、極めて狭いレンジに収まった。

昨年（2017年）の年初に、高値118円台を見たものの、昨年（2017年）の3月以降は、高値114円台、安値107円台の、わずか7～8円の狭いレンジ内で上下動を繰り返している。

今年（2018年）の相場が、これ程の狭いレンジ相場に収まるとは思っていないが、さりとて、当面のところは、この狭いレンジを打ち破るだけの材料が、見当たらない。

面白くない相場だが、面白くない相場だからと言って、何もやらない訳にもいかない。

面白くない相場の時には、その面白くないことを前提に、つまらない展開を予想することが必要なのだろう。

つまり、正直に言えば、ドル／円に関しては、今年の前半は、面白くない相場展開を予期して、相場に臨む必要がある、ということだ。

ドル／円以外に注目するならば、今年（2018年）の外国為替市場は、転換期を迎えている可能性がある。

ドル金利については、既に、金利上昇局面に入っている。

ドルの政策金利は、2015年12月に引き上げが開始された。

だから、既に、2年間、金利上昇局面が継続されている。

ユーロの政策金利に関しては、まだ、政策金利引き上げが実施されておらず、ということは、金利低下局面が、持続していることになる。

昨年（2018年）後半から、ECBの金融政策に変化がみられる。

2017年10月26日のECB理事会で、量的緩和（QE）での資産購入を、各月600億ユーロで年内維持することを発表した。

しかし、今年（2018年）以降は、資産購入を現行の半分、月300億ユーロに減額し、2018年1月から9月まで延長する、と発表した。

ドラギECB総裁は発表後の記者会見で、購入を「突然終了することはない」と強調するとともに、減額はテーパリング（量的緩和策の出口戦略）ではないと声明した。

しかしながら、量的緩和策が縮小に向かっていることは確かであり、その先に見えるのは、ユーロの政策金利の引き上げだろう。

今の時点では、気が早すぎることも十分に理解している。

ただ、世界的な景気回復が進めば、金融政策が遅れがちに、追随するのは、いつものことだ。

金融政策が、先行することは、事実上、あり得ない。

それは、金融政策が、一部の少数の権限者によって決定されるからだ。

一部の少数の権限者が景気の先行きを予測して、金融政策を前倒しに実施することは無い。

だから、必ず、金融政策は、遅れがちに、後追いになるのだ。

ECBの金融政策が、既に、遅れがちになっている可能性も否定できない、と考えている。

そう考えていくと、今年（2018年）の外国為替市場の最大の注目点は、ユーロ／ドル相場ではないか、と考える次第です。

+++++++++++++++++++++

（2018年01月09日東京時間14:30記述）